

2020.3  
(公社)富山県薬剤師会  
広報誌

# とみ やく 富 薬

3号

第42巻  
No.368



アマガサユリ *Fritillaria verticillate* Willd. var. *thunbergii* Baker (ユリ科 *Liliaceae*)



生薬 バイモ（貝母）

**生薬** バイモ（貝母） 地上部が枯れ始める5月頃に鱗茎を掘り取り、根を取り除いたものに砂と水を加え木箱に入れ回転し、皮をむく。水洗いして砂と皮を除き、石灰をまぶして水分を取り除いた後、よく陽乾し、石灰を除く。

**成分** ステロイドアルカロイド：fritilline, fritillarine, verticine, verticilline, apoverticine 等。

**効能** 鎮咳、去痰、排膿薬として咳止め、痰切り、催乳、止血、はれもの、利尿、鎮痛に応用する。滋陰至宝湯、清肺湯等の漢方処方に配合される。

元富山県薬事研究所  
薬用植物指導センター

村上守一氏 写真撮影

## ○○表紙について○○



中国原産の球根性の多年草で春早く茎を伸ばし、高さ30-80cm、直立し線状披針形の葉を輪生します。上部の葉は先端部が更に伸長し、内巻きに巻鬚状になります。茎の先端または上部の葉腋に釣鐘状の花をつけ、6枚の花被片は淡黄色で長楕円形、網紋がある花を下向きに咲かせることから「編笠百合」の和名が付いたと言われていました。清楚な感じと花の無い時期に咲くことなどから切り花として珍重されています。鱗茎は大きいもので3cm以上、重さ20g以上で2個の鱗片からなり、大きな母貝が小さな子貝を抱くように合わさっていることが中国名、生薬名の由来になりました。陶弘景(456-536)も「形が貝が寄り集まったようだから貝母と名けたのだ」と言っています。日本に渡来したのは意外に遅く、享保

3年(1718)に清の商人から幕府に献納されたと伝えられ、『地錦抄附録』(1733)に「ばいも」の名で細密に描かれています。また小石川御薬園の「享保六年(1721)丑九月より御預け御薬種覚」に「(長崎より送付)貝母 九四根」とあり、球根94株が入り栽培されたことが記されています。これについて『一本堂薬選』(1729-34)に「近時、官園に一種の貝母あり。葉百合葉に似て甚だ光滑り、細白毛茸あり。花亦百合に似て而淡黄色」という記述があります。『物類品隲』(1763)にも「漢種上品享保中種子を伝う」と記されています。『本草綱目啓蒙』(1803)には詳しく「漢種今諸國に多く種ゆ。冬月の末、宿根より葉を生ず。初生は卷丹(*Lilium lancifolium*)の葉に似たり。一科に叢生す。老根の者は春、圓茎を抽で、高さ一、二尺許、二、三葉相對して生ず、漸く狭細にして石竹(セキチク *Dianthus chinensis*)葉の如し。梢葉は端に一線ありて、卷曲す。三月に茎の末葉間ごとに一花を倒垂す。形風鈴に似て小さく、白頭翁(オキナグサ *Pulsatilla cernua*)花の如し。長さ七、八分、径り六分許、六弁、外は淡黄白色、内は紫色の網の紋あり。実を結ぶ者稀なり。夏に入りて苗枯れる。歳ごとに子根繁殖す。実を結ぶものは根枯れる。実は百合実の形の如にして八稜あり。稜ごとに羽起て長し。内子も軽薄にして百合子の如し。嫩根は小くして半夏の如し。薬用に佳なり。これを川貝母と云う。老根は大にして水仙(スイセン属 *Narcissus*)或いは大蒜(ニンニク *Allium sativum*)の如し」と詳しい植物の説明や各地で栽培されていたことなどが記されています。川貝母についての記述は誤りです。

国内にはバイモ属の植物が数種自生します。一番知られているのはクロユリで、北海道以北の低地に分布する染色体数が3倍体で草丈が高く50cmほどになり、栽培可能なエゾクロユリ(*F.camtschaticensis* var. *camtschaticensis*)と、本州、北海道の高山に分布する染色体数が2倍体で、草丈は10-20cmのミヤマクロユリ(var. *keisukei*)の2亜種があります。富山・立山のクロユリには佐々成正がこの花の呪いを受け滅びたという伝説があります。他に山形県から新潟、富山、石川県の日本海側と岐阜、愛知、静岡県に分布するコシノコバイモ(*F.koidzumiana*)は草丈10-20cmほどと小型で鱗茎も小さく、淡黄色で広鐘形、下向きにかわいらしい花を一輪咲かせ、山野草として栽培されることもあります。その他ホソバナコバイモ(*F.amabilis*)、イズモコバイモ(*F.ayakoana*)、ミノコバイモ(*F.japonica*)、カイコバイモ(*F.kaiensis*)、アワコバイモ(*F.muraiana*)、トサコバイモ(*F.shikokiana*)などのコバイモ類が国内に自生しています。『出雲風土記』(733)の秋鹿郡の山野に「貝母(ははくり)」と記載されたり、『延喜式』(927)典薬寮、諸国進年料雑薬の安房国に「貝母八両(300g)」、美濃国は「貝母三斤(1.8kg)」と実際に生薬が献納されたこと、『本草和名』(918)に「貝母、和名波々久利」、『倭名類聚抄』(1731-37)には「和名、波々久里」と名付けられたものは、これらコバイモ類を基原植物としたものであろうと考えられています。和名ハハクリ(母栗)は貝母と同じく大きな鱗茎が小さな鱗茎を抱くように見える姿を母に例え、形態が栗に似ていることからつけられたと推測します。(村上守一 記)